

「旅への誘い」

● 浅原義雄

シャルル・ボードレールの詩集『悪の華』(“Les Fleurs du Mal”)の一節に「旅への誘い」(L'invitation au voyage)がある。旅行好きの人間には何とも魅力的な響きを持つ詩である。この言葉を聞いただけで、閉塞した現実世界から夢幻の彼方へ、一足飛びに連れ去ってくれるような気分になるから、詩人の言葉の魔術は素晴らしい。

—Les soleils couchants

—落日が

Revetent les champs,

野や運河や、

Les canaux, la ville entière,

街全体を染めあげる、

D'hyacinthe et d'or

赤紫と金色に。(西川長夫訳)

「沈みゆく太陽」が「赤紫と金色に野や運河や、街全体を染め上げる」光景を想像すれば、よほどの朴念仁でない限り、心はすでに旅情に駆ら

れてしまうだろう。

今でこそ、交通網の発達と円高のおかげで海外まで気楽に足をのばせる時代になったが、三・四十年前はそんなに遠くまで旅はできなかった。私は大学時代にプラス・バンド部に所属していたため、演奏旅行で他人よりは日本各地をかなり回ったが、異国の地は夢のまた夢であった。

だからこそ萩原朔太郎の『純情小曲集』の一篇「旅上」は、文字通りに実感できた。

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

せめては新しき背広をきて

きままなる旅にいでてみん

汽車が山道をゆくとき

みずいろの窓によりかかりて

われひとりうれしきことをおもはむ

五月の朝のしのめ

うら若草のもえいづる心まかせに

さすがに我々の学生時代でも、「新

しき背広をきて」、「きままなる旅にいで」はしなかったが、白ワイシャツに黒ズボンのいでたちで、文庫本と時刻表をバックにしおぼせておくのがオーソドックスなスタイルであった。現代ならさしずめ破れジーンパンにTシャツをまとい、ぶかぶかのスニーカーを履き、携帯電話片手のスタイルといったところか。

昨今は温泉ブームで、女性でもグループでお手軽に出かける。つい二・三十年前頃まで、温泉は男性及び老人の専売特許であった。「温泉に行きませんか」と言うだけで、老人扱いされてしまったものだ。温泉場は「湯治場」というくらいだから、かつては「湯で療治する場所」であったはずだ。今日のように、前日の午後三時頃来て、翌日十時前に出て行ってしまったら、そんな短期間で治せる病気なんてありはしない。一日経って癒える病は、せいぜい二日酔いぐらいだろう。

岡本綺堂の随筆「湯巡り」を読むと、箱根に行くにも明治時代は足の便が悪かったから、一日目は戸塚辺りで泊まり、二日目は小田原近くに宿を取って、三日目にしてやっと箱根の湯に身を沈めることができたよ

うだ。会社の忘年会までも箱根でする現代のご時世を、昔の人が見たら目をむくであろう。

還暦を過ぎた老人の域に達した我が身にふさわしいのは、霊場巡りであろう。同行二人と書かれた編み笠をかぶり、「南無大師遍照金剛 同行二人」と背に書かれた白衣をまとい、手っ甲・脚絆を巻いて草鞋を履き、輪袈裟をさげ肩に頭陀袋を背負い、右手に金剛杖、左手に数珠を持ち、六根清浄と口でぶつぶつとなえながら、四国八十八箇所の寺をとぼとぼ歩く自分の姿を連想してしまって、意気があがらないこと甚だしい。

年寄と違って若さが有り余る学生諸君は、大いに旅をして見聞を広めるとよい。自由に使える時間がたっぷり持てるのが、学生時代の特権である。温泉場は年寄り臭くて敬遠したかったら、青春十八切符で行けるところまで旅してみるのもよし、それでも金がかかりすぎると思ったなら、一区間の料金で途中下車せずに山手線を隣駅までぐるりと回ってみるのもいい。百六十円で約一時間がつぶせる。車窓から外の景色をぼんやり眺めているだけで、思わぬ発見があるかもしれない。